

薩摩國出水郡出水町尾崎貝塚調査報告

島 田 貞 彦

文學博士 濱 田 耕 作

一、貝塚の所在及地形

〔圖版第一―第四〕

本貝塚は薩摩國出水郡出水町大字上知識字尾崎^{カミチシキ}にあり。同地尾上卯助氏邸宅背後の畑地を中心として、其の西南に擴がれり。蓋し此地は西方高尾野川、東南方平野川^{テラ}に挟まれたる扇狀洪積臺地の一端に位し、米ノ津川の構成せる冲積平地に臨めり。貝塚構成の當時にありては、米ノ津川の河口は、出水町に近く、八代灣は深く、此の貝塚附近に、其の海波を寄せたるものあるを想像せしむ。

貝塚は標高約二十五米突の臺地に位す。其の北方は臺地に沿ひて、中下溝⁽¹⁾と稱する水溝を拓きし爲め、地形を變じたるも、南方一帯は畠地となり、三四の人家あり。水溝の堤上には雜樹繁茂せるを見る。此の臺地上に貝殻の散布し、又た石斧等の發見せられたることありしも、貝塚たる

ことを知るもの無かりしが、大正六年土地の人黒木繁氏之に注意し、荒田道明氏に之を質し、荒田氏は大正八年春、實地を検して、其の貝塚なることを認め、黒江隆三氏之を「新出水誌」に記載せられたり、然れども未だ中央學界の注意に上らざりしが、翌九年七月鹿兒島縣史蹟調査委員山崎五十麿氏此の地に出張して、貝塚の存在を聞き、其の一部を試掘し之を學界に紹介せらるゝ所ありき。⁽²⁾

東北帝國大學教授醫學博士長谷部言人氏は山崎氏の懇懇により、此の貝塚の發掘を企畫し、本學考古學教室亦た氏の發掘を援助することとを約し、大正九年十二月長谷部博士指揮の下に島田貞彥主ら之を助け、濱田耕作亦た其の地に臨み、同貝塚の主要なる地區の殆ど全部を發掘調査するを得たり。

【註】(1) 此の水溝は享保年間、平良川上流より灌漑の爲め疏通する所なり。

(2) 山崎五十麿君「薩摩國出水貝塚に就て」(考古學雜誌第十

一卷第一號)同君「再び薩摩國出水貝塚に就いて」(全上第十一卷第五號)

二、發掘及貝塚の構造

〔圖版第二—第四〕

大正九年十二月二十日發掘を開始して同月二十五日に至る。此の間毎日人夫六名を使用したるが、なほ出水町上知識、横尾、八坊等の各青年團より連日數名の人夫勞力の奉仕寄附を受け、多大の便宜を得たり。

發掘の地點は嚮に山崎君の試掘せる地點に接して、其の以南尾上卯助氏の邸宅の背後に至り、總面積約五十坪に及び、之を第一區より第十二區に劃し、各區の貝層遺物等を精査せるに、其の結果左に表示するが如し。

地區	表土厚	貝層厚	貝殼	土器	石器等	其他
I	尺 七—一、〇	約一、四〇—一、七〇 尺	かき、はまぐり、あさり 多シ	破片多量	石斧、貝器	人骨破片
II	一、二〇	九〇—一、五〇		貝層下部粘土層 接シ多量	鑿形石斧、凹石	馬齒
III	一、二〇	一、三〇	微量、黒土ヲ混ズルコ ト多シ		骨器	
IV	一、一〇	一、二〇				
V	一、二〇	一、三〇				
VI	一、二〇	一、三〇				
VII		一、一〇—一、四〇	になノミノ貝層アリ			
VIII		一、一〇	はまぐりヲ主トス。東 南隅貝層ナシ	多量	骨器	人骨片
IX		一、三〇				
IX		一、三〇				
X		一、三〇		少量		
XII	一、三〇	一、二〇	東邊貝層ナシ貝殼少量			

以上之を要するに、表土は後世削平せる所ある可きも、現在に於いて厚さ約一尺二寸あり、次に貝層を見る。其の厚さ多少の出入あるも、一尺二三寸を常とし、最も薄きは七寸、最も厚き部分に於いて一尺七寸に及び、次に自然の粘土層に達す。其の礫石を包含せるは洪積せる地層なるが故にして、此の粘土層以下には何等遺物の存在を見ること無し。

貝層は牡蠣蛤等を主とし、其の貝の種類三十八種を數へたり。多少の有機土を混するも殆ど貝殻の密集せる地區少なからず、其内猪鹿等獸骨斷片の挾在を見ること多く、少許の人骨破片をも發見せり。此等に關しては、別に長谷部君の論文に記す所あり。ただ土器破片は比較的多量に存在せるも、其の完形を見るに足る可き大破片は殆ど之を認むること能はず。石器及骨介器亦た貝層中に存するも、其の量微少なりしを注意す可し。

以上地區の發掘と共に、貝塚の廣袤を知らんが爲め、各地點に豎穴を穿ち、貝殻の有無等を檢査せるに、其の結果左表の如し。

地點	貝層	貝層厚
1	有	三、〇〇 ^尺
2	有	三、〇〇
3	有	三、〇〇
4	有	九〇
5	有	
6	有	
地點	貝層	貝層厚
7	ナシ	
8	ナシ	
9	ナシ	
10	ナシ	
11	ナシ	
12	有	一、〇〇
地點	貝層	貝層厚
13	ナシ	土器破片アリ
14	有	表面ヨリ
15	有	一、五〇〇
16	有	表面ヨリ
17	有	
18	ナシ	

21	20	19
ナシ	ナシ	ナシ
24	23	22
ナシ	有	ナシ
中下溝堤上		
26	25	
ナシ	有	
一、〇〇		

之によりて是を觀れば臺地の東北端は、中下溝によりて切斷せられしものにして、貝塚は此の溝の外側に至るまで廣がれるを見る。即ち(1)(2)(3)の地點の貝殻の存在は之を證して餘あり、而して此の臺地は南方より東北方に向つて漸次下傾斜せるものなることは發掘地點及(4)(5)の地點に於ける貝層上部の高さ臺地北端水田を零尺として約二十三尺あるに對して、(1)(2)(3)の地點に於いては約十四尺に過ぎざるを以て知ることを得。(圖版第四斷面圖參照)又た臺地の南方に於いては、尾上氏邸宅前庭及び路面に貝殻の露出せるあるも、其の以南には貝殻を見ること無く、東方は(7)乃至(13)の地點に於けるが如く、貝殻を認めず。即ち貝塚は此の臺地の北西部に形成せられしものにして、吾人發掘の地域は、恰も其の中心に近きものなりしを推察す可し。

更に此の貝塚の南方約四十間を隔つる臺地上に貝殻の散布を見ること(23)(25)に於けるが如し。此の兩者は元來連續して、臺地の南方に、前記主貝塚と分離して形成せられし小貝塚とす可く、現在の狀態に於いては、直ちに兩者連續して、後者が其の一端なりとするを得ざるが如し。

三、石器及骨貝器

〔圖版第五・第六〕

出水貝塚發掘の結果、吾人の發見せる石器は其の數量多からず、僅に石斧、石鑿、錘石、凹石十數箇の外、圓石、砥石數箇を得たるのみにして、殊に石鏃類は其の材料たる黑曜石片を獲たるも其の成品は一箇をも認むる能はざりしは、注目す可き事實なり。

石斧は凡て九箇あり。水成岩の接觸變性岩 (Hornfels) 又は之に類する石質より成り、其色概ね青綠色を呈す。⁽¹⁾内二箇は打製に近きも。^(圖版第 五・13・18)他は悉く磨製なり。ただ其の製作は石質の爲めか太しく精巧なりと謂ふ可からず。又た多くは其の一端を缺損せるを以て、全形を認め難きも、稍々貝斧の形狀に近似し、刃部は膨みありて蛤刃を呈す。内一箇は裏面に磨痕あり、或は砥石の用に供せられしものならむ。石鑿は一箇あり、刃部狹長にして、其の特徴を見る可し。^(同 上 14)

錘石^(圖版第 六・11)、敲き石^(同 上 2・3・4)、砥石^(同 上 6・7・10)及圓石^(同 上 6・7・10)等は凡て安山岩 (andesite) を以て作られたるが、敲き石は主として槌石 (hammer stone) として用ゐられしなる可く、圓石は土器製造用若しくは玩弄用に供せられしならん。錘石は魚網に附せられし外紡織に使用せられしものなること、他の諸遺跡に於けるものと殊ならず。

骨製品は凡て六箇を數ふ。其の一は一端に孔を穿てる大針にして、其の尖端を失へり。^(圖版第 五・1)或は始めより針孔を開かざるものあり。^(同 上 3・5)又た頭部に截目を附したる扁平の針あり。^(同 上 2)或は頭髮の笄に用ゐられたるものか。以上の外獸類の趾骨の一端に孔を穿ち、今ま其の一部を缺くものあり。^(同 上 6)是は裝飾用の下垂物たるを想像するに足る。

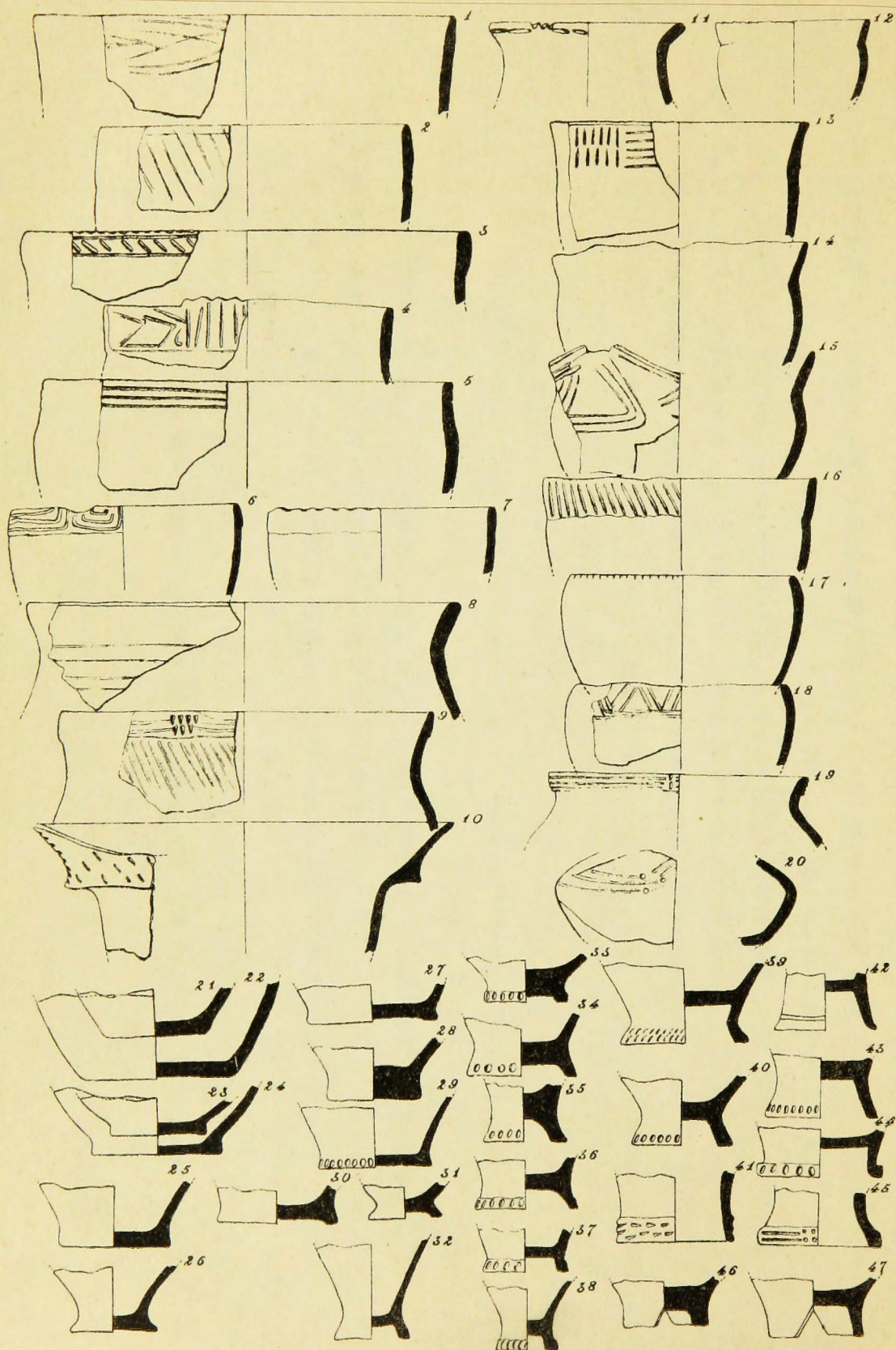


Fig. 1. Pottery found at Idzumi Shell-Mound.

貝殻製品は三片を見る。内二箇は貝輪の斷片にして、一はヘンケイガヒ (*Glycymeris albolineatus*) (2) Lischke) の殻を用ゐ、(同上) 他はアカヒ類 (*Arca* (*Scapharca* sp.)) のそれを用ゐたり。又た其の他の一はチリボタン (*Glycymeris cuneatus* Lischke) の美しき紅色の殻を利用し、其の半月形の兩端に各一孔を穿ちたり。今ま其の一端を缺く。嚮の獸趾骨と共に裝飾品たること疑ふ可からず。

註(1) 本學教授理學博士小川琢治氏の鑑定を煩はせり。

(2) 本學理學部助手黒田德米氏の鑑定を請へり。

四、土 器

〔圖版第七—第一九〕

出水貝塚土器は主として貝層中に存在し、間々其の上層に見ることあり。其の種類は、貝塚式石器時代土器の一種に限られ、祝部土器彌生式土器等は、其の表面に於いても之を見ること無かりき。然れども貝塚式土器を仔細に觀察すれば、之を其の製作紋樣等より二類に分つことを適當となす。

(一) 本貝塚發見土器の大部分を占むるものにして、其の色黒褐色を帶び質は粗鬆にして砂を混すること多く、其の製作亦た精巧ならず。其の裝飾模様は主として直線式にして、曲線式のもの少數なり。

(イ) 直線式模様 口縁部に凸帶を作り、或は之を作らず、其上に垂直或は傾斜せる平行直線を

刻せるもの、或は水平の平行直線を繞らし、其の一部分を垂直並行線若しくは點線の一群を以て中斷せるものを最も多しとなす。(圖版第七八等)此の後者に於ける意匠は、水平並行線の器縁を繞らせる紐繩より出で、其の結目を示すに豎線の一群を以てせるものなること明なり。又た此の豎線の一群は時に上部扇狀に廣がれるものなるを見る。(圖版第一〇一三三)此の外直方形の一區劃を對角線を以て切り、之に他の直線を配せるものあり。(圖版第九下圖等)是は其の紋様の性質上寧ろ後述曲線式模様に近きものにして、其の簡單直線化せられたるものなりと見るを得可し。以上の外魚骨狀網目狀等の模様あるも、固より部分的若しくは特殊のものに過ぎず。

(ロ)曲線的模様 前者と同じく口縁部の凸帶或は縁部に施され迂曲せる波紋的曲線を多少垂直或は水平に並列する法式に於いて、亦た前述直線式模様と相似たり。(圖版第二四上圖)又た直方形の區劃内を斜線を以て切り、之を軸として曲線紋を配するものあり。(全上圖一三五等)要するに此の曲線式模様は直線式模様と直接の關係を有し、一方は他方の簡單化せられたるものなるを認むるに於いて何等不可なきを見る。此外曲線的模様の變種に至りては一々之を記さず。

本類の土器の完好の遺品無く、破片の之を復合し得るもの無かりしを以て、其の精確なることを知り難しと雖も、大多數は口の開ける鉢類に屬し、時に肩部に膨みを有するものあれども、何等の變化なく直に底部に向つて縮小せるものあり。又た底部は平底の單簡なるもの、外上げ底にして一種の臺をなし其の端に、口縁部と相似たる模様其他を附せるもの少なからず。(圖版第一七)罕には臺縁を切り、數箇の脚を形成せるものあり。(同上四七)此等は皆な器體とは別に臺部を作り、後に附着せしめたるものなり。斯の如き底部の手法は余輩の未だ曾て九州石器時代

土器に見ざる所にして、本貝塚土器の一特色となす可きなり。次に口縁部は突出して角張れるもの、其の上に截目を附したるもの、捉手の退化せりと認めらるゝものあり、又た簡單なる捉手透彫を縁部に存するもの等あり。此等の一々に至りては圖版及土器圖（第一）に就きて見可し。

（二）第二類は繩席紋を有する一類にして、其の製作前類に比して精巧なるのみならず、其色亦た赤褐色を帶び、表面は磨研せられて光澤を有するを常とす。模様は繩席紋を挾める二條の並行線を以て寧ろ曲線的に配置し、其の法式は絡繩の意匠に發せり。（圖版第二）中には押壓せる連點を紋上に施せらるもの等あり。器形に至りては小破片なるを以て全形を推し難きも、中に腹部急に張り出したる鐵鉢形のものあり。（全上）斯の如きは第一類に於いて絶えて認むる能はざりし所となす。此の第二類の土器は其の數量の甚だ少なく、其の製作と第一類と同じからざる點より見て、之を本貝塚固有のものとなすこと穩當ならざるに似たり。

最後に記す可きは本貝塚より、土器の破片を以て製したる直徑一寸乃至三寸位の圓板狀のもの二十餘箇を發見せること是れなり。（圖版第一）其のうち二箇には中央に孔を穿ちたるも、此等は紡錘車として使用するには餘りに粗製なり、思ふに兒童の玩弄用に供せられたるなる可く、其の類品は本邦各地の貝塚等より多く之を發見せり。又た土盤の破片かと思はるゝもの一箇を得たるも確ならず。要之本貝塚發見の土器は、少數の第二類を除きて、大多數は黒褐色粗製の直線式模様を附せるものにして、其の製作と模様とは之を本邦西南部の石器時代土器にありては肥後轟貝塚發見の直線式模様の土器に類似し、又た同國阿高貝塚土器の紋様とも其の趣

味を同ふせるものあるを見る可く、更に松村⁽³⁾君の報告に係る琉球萩堂貝塚のそれとも相似たるものあるを認めずんばあらず。即ち其の紋様の主として直線式意匠に出で、繩席紋の適用は殆ど之を排除し、手法一般に粗笨なること是れなり。而かも一方には少量の繩席紋應用の土器あり、其の他地方より移入せられたりと見るも、なほ此の兩者は同一時代に或る場所に於て共存せるの事實を語るものあるを否む可からず。松村君は琉球貝塚土器の直線式模様を以て、模様としては東北地方貝塚に於いて多く見る所の曲線式模様の祖型には非ずして、却て墮落的手法に出でたるものならむと説かれたり。而かも余輩は轟貝塚土器に於いては、其の隆起細帶紋爪形紋等を有するものを以て古拙なるものとし、直線波線紋を有するものを以て、聊か新しき性質を示し、寧ろ彌生式土器に近きものあるを云へり。松村君の所説は余輩の見地と毫も杆格するものに非ずして、余輩の最も賛同の意を表せんと欲する所なるのみならず、此の出水貝塚に於いて、少數の曲線式手法に出るものは、直線式のその祖型の方向に屬し、多數の直線式手法に成れることは、此の模様としての墮落或は簡單化せられたるものなりと見る點に於いて全く相一致せる見解と云ふ可きか。若し其れ其の製作者の實時代の如何に至りては、別個の問題にして、單に土器の模様のみよりして論斷す可きに非ざるや勿論なりとす。

【註】(1) 本學考古學研究報告、第五冊「肥後國宇土郡轟村宮莊貝塚發掘報告」參照

(2) 肥後國下益城郡豐田村阿高貝塚は、大正五年三月熊本縣廳發掘調査に據る。(熊本縣史蹟調査報告第一回參照) 第

二圖に掲げたるは醫學士山崎春雄君より本學に寄贈せられたるものに係れり。

(3) 松村君「琉球萩堂貝塚」(東京帝國大學理學部人類學教室研究報告、第三編) 參照



Fig. 2. Pottery found at Ataka, Higo.

五、結 論

出水貝塚は薩摩國に於いて發見せられたる最初の貝塚として、其の發見せられたる遺物に於いて敢て特殊なるもの無しと雖も、其の考古學的價值は頗る重大なるものありて存す。不幸にして人骨の完好なるもの發見せられず、僅に山崎君の獲たる頭骨の破片の外、這回の發掘に於いて、下肢骨の斷片數個を發見せるに過ぎざること、別に長谷部博士の報告に見る所の如し。然れども同博士の研究によれば、此等の人骨破片は、なほ吾人に告ぐるに、此の貝塚に占居せる石器時代の人民は、河内國府、備中津雲、肥後轟等の諸遺跡に於いて發見せる人骨と同一特質を有し、之を別民族なりとするを得ず。全く同一民族に屬せるものとするの適當にして、其の特質は現在アイノ人のそれに相似たるもの多きと同時に、却つて之に反して現日本人のそれに近きものあるを指摘せられたり。吾人は今ま茲に人種論を試むるの意志を有せず。ただ斯の如き特質を有する民族の、少くとも日本西南部を通じて、石器時代に於いて棲息し、出水貝塚亦た彼等の一遺跡たりしを言ふに止めんとす。

然れども人骨の研究は、更に土器に現はされたる言語の地方訛^{ディアレクト}を解讀するによりて、此の出水貝塚の住民は、其の文化上の近似を肥後轟貝塚、阿高貝塚等に有し、又た琉球に於ける石器時代人民とも接近せるを認めしめ、却つて同國指宿村遺跡下層の土器製作者とは相隔れるものありしを想像せしむ。此等の諸地方は獨り地理的に薩摩國に接近せるのみならず、土器紋様の性質に於いても類似を有すとせば、其の文化的關係より、更に此等石器時代人民の此等諸地方

に分布植民せる時代の相近きものあるを想像するの一資料たるを得可し。而かも肥後轟貝塚に於いては隆起細帶紋、爪形紋等を施せる稍々古式の一類の外に、直線式紋様の一類あり、出水貝塚に於いては、曲線式模様の一類の外に、多數の直線式模様の適用せられたるものあり。層的には之を區別すること能はざるも、紋様の發達上前後を順序す可きものゝ、同一貝塚より發見せらるゝは最も興味ある現象に屬す。

出水貝塚は其の廣袤に於いて必しも大ならず、貝層は其の厚さ僅に一尺有餘にして、其の間に層序的區別あるを見ず。土器も亦た一類に屬し、遺物の上より時代的發達を明瞭に順序するを得ず。思ふに此地に於ける石器時代の住民は、其の數比較的多からず、占居の時期亦た太しく長きものに非ざりしが如し。彼等は當時の文化圈の一隅にありて、ただ其の波端に浴せるのみ、何等特殊の文化の此處に發展したること無かりしなり。若しそれ指宿村遺跡との關係、九州他地方遺跡との關係、其の人種問題等の詳細に至りては、之を推論するの時期に達せざるものあり。吾人が本報告書の範圍外に屬するものあるを思はしむるを以て、今は凡て之を省略に附せり。